

【キーワード】 医療機関の設計

待たせず業務効率も上げる 医療機関設計のポイント

感染症対応や患者満足度の観点からも待ち時間や滞在時間は大きなテーマになっています。そのカギとなるのが動線を含めた設計です。今回は、医療機関の設計・施工を専門にしている株式会社コンパスの長渡和久代表取締役のポイントや動線の工夫などについて解説してもらいました。

小規模診療所は「面型」タイプがおすすめ

最初に、作業効率の悪い医療機関にならないための基本的なポイントを解説します。1つ目は設計プランのタイプです。医療機関のプランは大きく2つのタイプに分けてとらえることができます。

タイプ1は、受付や診察室、処置室、検査室などを独立させて廊下でつなげる「線型」タイプです(図表1)。このタイプは、病院や比較的規模の大きな診療所に向いています。こうした医療機関はスタッフ数も多く、業務も部門ごと

に分かれていて、診療中に部屋の移動がほとんどないため、このタイプが向いています。

また、線型には患者さんのプライバシーを守りやすいという特徴もあります。

タイプ2は、医師やスタッフ、患者さんのいる場所をゾーンで分けながら設計する「面型」タイプです(図表2)。このタイプは、受付が検尿の準備をしたり、看護師が電話対応をしたり、院長がX線撮影をしたりと、スタッフが複数の業務を兼務し、仕事で部屋をまたぐことが多い小規模診療所に向いています。面型タイプはスタッフ

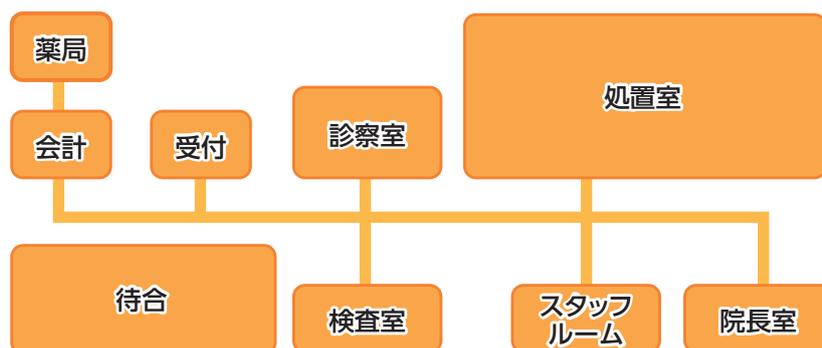
の移動距離を短くできるため、業務効率が上がり、廊下が少ないので面積効率が上がります。

効率性よりも患者満足度を優先することで高い単価を見込める自費診療中心や、病院あるいは規模の大きな診療所には線型タイプが、少ないスタッフで時間効率や作業効率の向上をめざす、あるいはそもそもの面積が小さい診療所には面型タイプをおすすめします。

オモテとウラの動線は混在させてはいけない

次に、動線です。これは、患者とスタッフの両方が使う「オモテ」

図表1 「線型」タイプの設計イメージ



図表2 「面型」タイプの設計イメージ



と、スタッフのみの「ウラ」に分けて考えるとよいでしょう。前者は診察室や処置室、後者はバックヤードや院長室などです。このオモテとウラが混在するとオペレーションの効率は下がります。たとえば、患者さんが診察室(オモテ)からレントゲン室(オモテ)に移動する際、操作室(ウラ)を通らなければならないようなケースです。

患者さんの動線は一般的に「入口→受付→待合室→診察室→処置室→会計」という流れになります。この流れのとおり部屋が構成されていると、患者さんをスムーズに誘導することができます。

これらは基本的なことですが、無視したケースが散見されます。おそらく、医療機関設計の経験が少ない設計者による提案だと考えられますが、開業後に「使いづらい」とならないように、図面を確認する際には動線についても留意してください。

動線はスタッフを優先 家具・機器の配置も忘れずに

基本的なポイントを踏まえたう

えで、長年医療機関、とりわけ診療所の設計に携わってきた設計者の立場から設計段階で考えておくべき各論的なポイントについても紹介しておきます。

1つ目のポイントは「診察室は院内の中央に配置する」です。理由は、院長が全体の動きや状況、周りの雰囲気などを把握しやすくなるからです。

2つ目のポイントは「動線は、患者さんよりもスタッフを短くするほうが業務効率は上がる」です。少ない人員で多くの患者さんを診る場合、スタッフの動線を短くしたほうが作業効率は上がります。そうなれば必然的に対応もスムーズになり、待ち時間も短くなる傾向があります。

また、「見えない動線」も重要です。これは、紙の書類や検尿コップの受け渡し、ちょっとした情報共有など、人間以外のモノや情報が行き来する動線です。スタッフの動線を短くしても、モノや情報の受け渡しが遠回りになっていては意味がありません。

3つ目は「面積や動線は家具の

配置も含めて考える」です。たとえば、ロビーチェアを置くと入口から受付までの動線に支障が出てしまう待合や、必要な機器が入らない検査室といったケースがあります。これらは、図面に家具や機器が描かれていなかったことが原因と考えられます。

コンセントの数などは開業後でも対応できなくもないですが、必要な機器を置く場所がないなどは、そう簡単には対応できません。逆に、設計の骨格さえしっかりしていれば、小さな変更は開業後でも行えます。

時代や社会の変化、患者層、地域性、テナントや土地の面積、形状、診療科目、スタッフ数、院長のめざす姿などによって、優先すべきことや配慮すべきことは変わってくるため、医療機関の設計に正解はありません。

自院のめざす医療を実践するには何を大切にすべきか、ここで紹介した基本事項を理解しつつ、設計者とコミュニケーションをとりながら検討していただければと思います。